International Development Youth Forum 2016

国際開発ユースフォーラム2016 報告書

テーマ:“産業発展と環境保護”
2016.3.6.-3.13 @東京

Copyright © 2016 International Development Youth Forum 2016 All Rights Reserved.

目次

はじめに

代表挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
顧問推薦文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第 1 章　団体概要

IDYF とは
団体理念・目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
IDYF の歩み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

第 2 章　国際開発ユースフォーラム 2016

IDYF2016 のアジェンダ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
課題国選考（Agenda Setting）の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
参加者内訳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
フォーラム報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第 3 章　参加者の声

Memory of your IDYF・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
OBOG　からのメッセージ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

第 4 章　運営報告

事業スケジュール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
後援・協賛・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
会計報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
運営スタッフ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

おわりに

IDYF2016 の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

Copyright © 2016 International Development Youth Forum 2016 All Rights Reserved.

はじめに

代表挨拶

人類の歴史を振り返ってみると、そこには人々の叡智や愚かさや忍耐力を示す様々な出来事が存在します。私たちの今日の生活がその歴史の一片となるとき、私たちの子ども孫やその子どもたちはその一片に何を見るのでしょうか。世界中で次々と起こる悲惨な出来事の中にも、現世代と将来世代の双方にとってより良い世界を実現するための真の普遍的目標「持続可能な開発のための目標（SDGs）」に対する彼らの称賛については伺いの余地は無いと思います。しかしこれは、SDGs に含まれた「野心的」目標の全てが達成されると仮定しています。途上国先進国を問わず全ての国が法的拘束力無しに行動せねばならないことや同目標への取り組みを大幅に加速させなければならないことなどの困難により、SDGs 達成への道のりは決して平坦とは言えません。

これらの困難は一見解決し難いもののようですが、私たちはここにこそユースが世界を先導する巨大な機会が存在していると考えます。なぜならユースは主に次の二つの強力な武器を持っているからです。第一に、ユースは将来世代の声を代表することの出来る唯一の存在であり、よって経路依存性を持つ社会課題のステークホルダーとして政府を動かすことが出来るということがあります。第二に、国際開発分野のユースは共通して創造性と現地志向の姿勢を持っており、これはこの分野の既存アプローチの効果と効率性を大きく改善するものであるということがあります。実際に、革新的なアプローチで開発課題に取り組むユースは世界中に沢山存在します。ですから、現在のユース世代が相互に連携し議論していくことで私たちは人類の歴史の新たな一ページに成功の物語を刻むことが出来ると確信しています。そして私たちは、様々な能力と専門性を誇る世界中のユースが集うこの International Development Youth Forum（IDYF）こそ、そうした議論と協力を生み出すプラットフォームになり得ると考えています。この考えに基づき、私ども IDYF2016 運営スタッフ一同は、会議の質と成果を向上させるための様々な工夫を実践して参りました。今年度新たに導入した「課題国選考」はそうした取り組みの一つです。この選考において私たちは会議テーマとなる開発課題と日々関わっている現場から優秀なユースを選抜し、豊富な一次情報と現場感覚を会議の場に持ち込むことに成功しました。そしてこれらと世界中で活動するユースの経験と知見を融合させることで、真に革新的かつ現場志向の解決策創出に取り組みました。

本事業報告書では、世界中のユースが協働することで様々な困難を乗り越え、共通のゴールを目指す道のりを歩み出した瞬間を目にして頂きたいと存じます。

俵藤あかり、太田優人
共同代表
International Development Youth Forum 2016

IDYF 2016 Office

顧問推薦文

日本の若者が「内向き」になったと言われるようになって久しい。日本国内にも数多くの課題が山積していることを思うと、ある程度は仕方ないことではあるけれども、他方で、世界にはまだ一人一日 100 円未満の所得水準で暮らす絶対貧困人口が約 13 億人（日本の総人口の 10 倍）おり、インドの幼児（5 歳未満）死亡率（4.8%）は日本のそれ（0.3%）の 16 倍である。IDYF を立ち上げた諸君のように、世界の問題に直接関わりを持つキャリアを目指す若者が、それでも少なからずいることは心強い限りである。

IDYF は今年で 4 年目の比較的若い団体だが、参加者のネットワークは着実に積み上げられているようだ。今年度の企画では新たに「課題国選考」システムが取り入れられ、現場に即した議論の成果を実際の問題解決のために活用することを目指していると理解している。また持続可能な開発のための目標（SDGs）が採択され最近様々な議論がなされている中、今年の IDYF のテーマはタイムリーなものといえよう。

この文章を目にしている皆さんは、国際開発に多少なりとも関心を持っている人かもしれない。国際開発に関わるキャリアは途轍もなくやり甲斐があるものだ。好きで選んだ仕事は何十年やっても全く飽きないし、辛い時でもいくらでも頑張れる。しかし同時に、様々なしがらみもできてくる。途上国の様々な立場の人々（政策担当者、研究者、田舎のお百姓さんや日雇い農業労働者まで）と会話をする機会が頻繁にあるが、一度プロになると、そこでの人付き合いは特定の社会的文脈（援助や政策助言を「与える側」、研究成果を競うライバル、研究に必要なデータを収集する側、等）に縛られ、相手からもそういう目で見られがちになる。そのような自分の立場を離れて自由に交流をすることは、必ずしも容易ではない。

しかしながら、国内外を問わず、学生の時からの付き合いの友人は別だ。初めて出会った時のように、社会的立場のしがらみから自由に付き合える。この文章を目にしている人の中には、大学生も少なくないかもしれない。学問の世界は日進月歩である。例えば、開発経済学における過去 10 年程の間の分析手法の変化や実証的発見の蓄積の速さには目を見張るものがある。ということは、大学で最新の学問知識を身につけたとしても、卒業して 10 年も経つとその知識自体は時代遅れになってしまう可能性も十分ある。他方、大学時代に築いた人脈は、一生の財産として、その価値は増えることこそあれ減ることは決してない。

今から約 30 年前になるが、私自身も大学生の時にゼミ合宿で夜通し議論をしたり、社会や社会との関わり方について昼間から酒を飲みながら語り合う友人たちと出会ったりすることができた。そこでの議論には、今思い出すと赤面するような、現実離れした「青臭い」ものも多々あったが、しかし、そのような青臭い時間を彼らと共有したことが、その後社会に出て様々な「現実」に直面した際にも一定の理想を追うことを諦めない、という姿勢を育んでくれたのではないか、と思っている。その友人たちは大学卒業後、民間企業、ジャーナリズム、役所、主婦、政治家、NGO、研究者など様々な方向に進んでいるが、30 年経った今でも、昔ながらの社会的な柵のない付き合いが続

く。そしてそのような交流は、自分の仕事にも、新鮮な刺激や反省の材料を与えてくれる。

そのような友人達が世界中の各地に散らばっているとすると、こんな魅力的なことはない。もし30年前にIDYFがあれば、私も真っ先に参加をしたことであろう。

東京大学公共政策大学院　教授
不破信彦

第 1 章　団体概要

IDYF とは

IDYF（国際開発ユースフォーラム, International Youth Development Forum）とは、毎年世界中数十か国から 18 歳～28 歳のユースが集い、特定の開発問題に対する解決策の創出を行うフォーラムです。例年、3 月に東京にて約一週間の間開催されます。

解決策の創出に当たっては、例年外務省や国際協力機構(JICA)、国際 NGO の職員の方々など、国際協力・開発問題のプロフェッショナルの皆様に情報提供や解決策の評価などの形でご支援を頂いております。

また、数十か国の若者が一堂に会する貴重な機会ですので、文化交流パーティーやオプショナルツアーなど、お互いの文化を学びながら楽しく交流を行うことができるプログラムも実施しております。

IDYF2016 の開催にて IDYF は 4 度目の開催となります。

団体理念・目標

世界の人口は 70 億人を超え、BRICs を中心に多くの国が貧困から脱却し、発展を謳歌しています。しかし、実際には一部の層に富が蓄積される傾向が継続し、貧困の罠から脱却できずにいる最貧層は依然存在しています。

そのような状況下で、日本に限らず世界中の多くの若者が国際開発という分野に興味を持ち、将来のキャリアとして検討しています。途上国、先進国それぞれの国で、自らの国や世界の開発課題に共通の関心を持ち、国際開発という道を選ぼうとしています。

しかし、国際開発を志すユースの交流の機会は限られています。国際開発に関心のある学生が結びつき、各国の状況を踏まえて互いの価値観を知り、意見をぶつけ合い、よりよい社会を目指して 1 つの成果を創り上げる。そうした経験を通じ、将来も続く関係を構築できる場として、国際開発ユースフォーラムを設立しました。

1. 団体理念

Design Our Future

この理念には、よりよい未来を先進国・途上国の人が一緒に作り上げるという思いが込められています。国際開発に関する意見や見方は、先進国・途上国という生まれた環境や育った環境によって異なりますが、そのような多様性を、議論を通じて互いに理解し合い、世界の課題を共通の課題として認識し、よりよい未来を創るための国際開発を共に模索します。

2. 目標

目標 1「国際開発に関心があるユースの継続的なネットワーク構築」

・世界中から国際開発に関心を有するユースを集め、将来にわたって活用できるネットワークを構築します。
・プログラムに創意工夫を凝らし、参加者同士の横のつながりを強固なものとします 。
・アラムナイ・ネットワークの維持・発展等により、参加者同士の年度を越えた、縦のつながりを強化します。

目標 2「多様な価値観と深い知見に触れる機会の提供」

・専門家の方々の協力のもとに テーマに沿ったインプットを行い、参加者が知識や考えを広げる機会を提供します。

・多様なバックグラウンドをもつ参加者が 議論を通して異なる考え方を知り、自らの価値観を深める機会を作ります。

目標 3「社会に新たな変化をもたらす成果の創出」

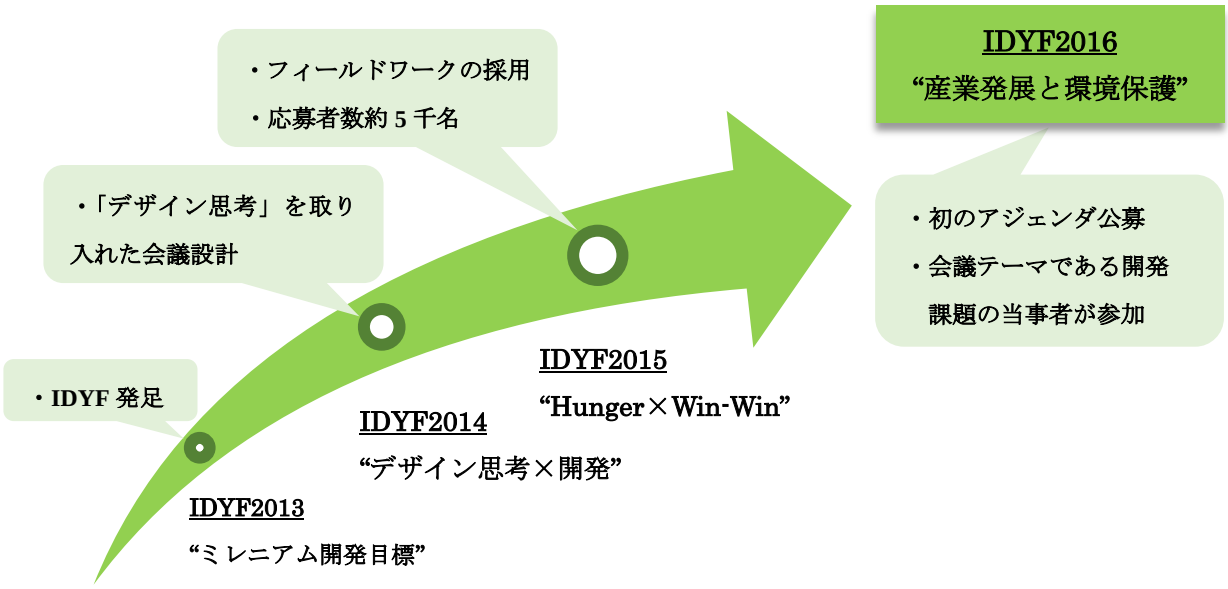
・単に集まり議論するだけではなく、議論の成果が社会にとって価値あるものとなるよう努めます。

・国際開発に関心のある人々にとって、自らが生み出した成果が社会に変化を与える経験の第一歩となるよう、その機会を提供します。

IDYF の歩み

International Development Youth Forum （IDYF）は 2013 年に初めて開催され、その後毎年 3 月に開催されてきました。開催ごとにコンテンツ・参加者の多様性等の面で進化を続け、現在は世界でも有数の知名度を誇るユース国際会議の地位を獲得しています。4 年目を迎えた IDYF2016 では「課題国選考」を初めて実施して会議テーマ公募制を導入するとともに、テーマとなる開発課題の現場からユースを招くことで一次情報に基づく議論を実現しています。

会議	開催地	規模	テーマ
IDYF2013	日本	14 か国 36 名 （内日本人 14 名）	ミレニアム開発目標
IDYF2014	日本	20 か国 38 名 （内日本人 12 名）	デザイン思考×開発
IDYF2015	日本	34 か国 44 名 （内日本人 8 名）	Hunger×Win-Win
IDYF2016	日本	28 か国 42 名 （内日本人 8 名、インドネシア人 7 名）	産業発展と環境保護



第 2 章　国際開発ユースフォーラム 2016

IDYF2016 のアジェンダ

Industrial Development & Environmental Protection

（産業発展と環境保護）

～インドネシア、ペカロンガン地方 の
バティック染産業による川の汚染問題を通して考える～

IDYF2016 のアジェンダは公募を経て決定されました。285 ほどのグループからの応募の中から、選考の結果、IDYF2016 のアジェンダは「産業発展と環境保護　～インドネシア、ペカロンガン地方のバティック染産業による川の汚染問題を考える～」に決定しました。

1. 大アジェンダ：「産業発展と環境保護」について

私たち人間はその技術や産業を発展させながら生活の利便性を高め、富を蓄えてきました。その一方で、産業革命の時代から顕著にみられるように、産業の発展のための開発はしばしば私たちの生きる環境を傷つけ、時には長期間再生が困難となるような状況を作り出してきました。現代では、これらの失敗から教訓を得ながら、世界中で産業の発展と環境の保護のバランスを取ることを目指した取り組みが進められています。今や「産業発展と環境保護」は、全世界が取り組むべきグローバルアジェンダであるということができるでしょう。

しかしながら、こうした試みは決して簡単なものではありません。とりわけ貧困の中にある国や地域では、毎日の暮らしを送ることさえ困難で、地元の産業が周辺の環境にダメージを与えるものであったとしても、環境保護のための施策を打つことができるだけの経済的余裕が無い場合や、そもそも環境の保護への意識が希薄であるというような厳しい現実があります。

2. 小アジェンダ：「インドネシア、ペカロンガン地方のバティック染産業による川の汚染問題」について

「産業発展と環境保護」の問題への解決策を考える際は、その国や地域の経済や教育における現状など、その地域に関する広範な知識や感覚を反映して検討を行うことが重要です。こうした

環境破壊の問題は、その地域の経済や教育など、様々な要素が絡み合って発現していることが多いと認識されています。その地域のそうした実情を知らずに解決策を立案しても、本質をとらえた効果的な解決策が立案できなかったり、そもそもその地域の実情に合わない解決策を提案してしまったりすることが考えられます。

そこで IDYF2016 では、公募の結果、ある特定の地域が抱える問題を取り上げて、その地域に住む若者から情報提供を得ながら解決策を検討することにしました。公募のすえ選ばれたのが、「インドネシア、ペカロンガン地方 のバティック染産業による川の汚染問題」です。

ペカロンガンはインドネシアの中部ジャワ州に位置する都市の１つです。伝統的な染物であるバティックの産業は、ペカロンガンの経済の原動力になっています。しかしながら、バティック産業の用いる染料に含まれる化学物質により、周囲の環境が破壊され、また、その地域に住む人々の健康に深刻な被害が出ています。

より環境に優しい染料や水の浄化技術も確かに存在しますが、そうした染料や技術は比較的高価なものであり、ペカロンガンのバティック産業の大部分を占める小規模な工場を経営する家族が購入することは困難であるのが現状です。

IDYF2016 ではこのインドネシア、ペカロンガン地方が抱える問題に取り組むことにより、最終的には全世界が直面する「産業発展と環境保護」の問題を解決するためのヒントを参加者が得ることができるようになることを目指しました。

課題国選考（Agenda Setting）の概要

1. IDYF2016 の応募体系

IDYF2016 では、通常の「参加者選考(Member Selection)」という応募体系に加え、「課題国選考(Agenda Setting)」という応募体系を設けました。「課題国選考」とは、IDYF2016 の会議テーマとなる開発課題をその当事者から募るもので、会議テーマの公募と会期中の議論における情報提供者の選考という二つの機能があります。

「課題国選考」の目的は 2 つあります。第 1 の目的は、特定の地域が直面する問題でありつつも、世界数十か国から集う若者が自らの問題と関連するものとして捉え、ある程度の当事者意識を持って解決策を考えようとすることができる問題をアジェンダとして選考することです。第 2 の目的は、その問題に実際に直面する現地の若者であり、かつ他の参加者に対して十分に情報の提供をすることができる能力や背景を有している若者を複数選考することです。フォーラムは約 6 グループによるグループワークをメインとして設計していたため、各グループに 1 名当事者の若者が情報提供者として参加できるようにすべく、5〜6 名以上からなるグループ応募を原則として公募を行いました。

こうした目的の下、「課題国選考(Agenda Setting)」は 2015 年 6 月から 10 月にかけて実施されました。提案内容に関する詳細な情報とその原因分析及び解決案の提示を求める大掛かりな選考であったにも拘らず、62 の国から 285 チームの応募がありました。提案されたテーマの中でも「教育」が 107 個と最も応募が多く、「環境保護・自然災害防止」が 65 個、「ヘルスケア」が 48 個と続きました。

その結果選ばれたのが、Aditya Bagus Sujati さんをリーダーとする、ボゴール農業大学の生徒たちです。インドネシアのペカロンガン地方に住む若者である彼らには、ペカロンガン地方が抱える「バティック染産業による河川の汚染問題」を提案して頂き、IDYF2016 ではこの問題を会議アジェンダとすることとなりました。そして IDYF2016 が彼らに奨学金を提供し、東京での本会議に出席して頂きました。

なお、フォーラムには 6 つのグループが存在したところ、Aditya さん率いるボゴール農業大学の生徒のグループは 4 名で構成されていたため、Aditya さんを通して追加の募集を実施し、その結果、追加で 3 名の若者がインドネシア、ペカロンガン地方から IDYF2016 に参加することとなりました。

図 1 ボゴール農業大学からの 4 名の参加者

参加者内訳

上述の「課題国選考」と「参加者選考」の結果として、28 か国から 42 名の若者が参加者として IDYF2016 に参加しました。以下にその構成を述べます。

参加者 42 名のうち 23 名が男性、19 名が女性であり、性別はある程度バランスの取れた構成であったと言えます。（図 2）また、年齢は 18 歳から 29 歳までと幅広い年齢の若者が参加していました。（図 3）

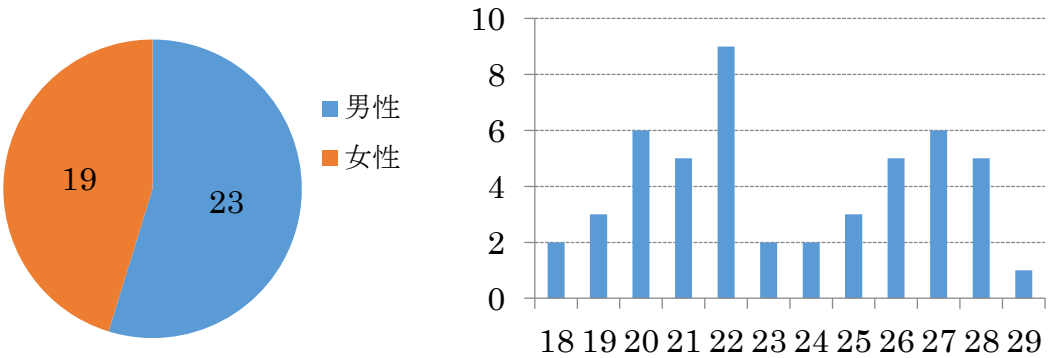


図 2 参加者の男女構成（人）

参加者の職業は、学部生が 23 人、大学院生が 10 人、社会人が 6 人でした。

学生の専攻は多様で、国際関係論と工学専攻者が多かったものの、生物学や、保険、農学、経済などの専攻の学生もいました。

社会人も、国連職員や NGO、民間企業などバックグラウンドは様々でした。

課題国選考でインドネシアから 7 名が参加した関係上、アジア地域からの参加者が多くなりましたが、28 か国の若者が集まり、非常に多様な構成になりました。（図 4、表 3）

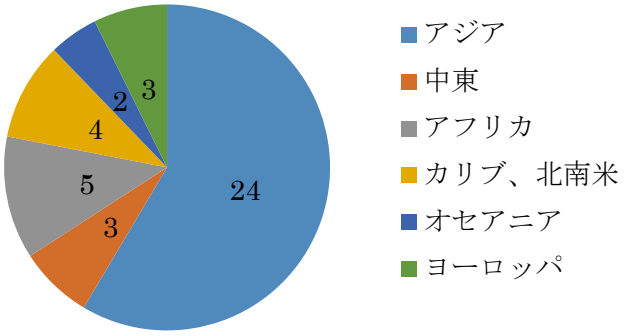


図 4 参加者地域別人数(人)

カンボジア	2	ジブチ	1
中国	2	エジプト	1
インド	1	ギニア	1
インドネシア	7	ケニア	1
日本	8	ナイジェリア	1
韓国	1	アメリカ	1
モンゴル	1	ハイチ	1
ミャンマー	1	ジャマイカ	1
パキスタン	1	ペルー	1
タイ	1	オーストラリア	1
ベトナム	1	フィジー	1
ヨルダン	1	アルバニア	1
カザフスタン	1	ノルウェー	1
トルコ	1	スウェーデン	1

表 3 参加者国別人数（人）

フォーラム報告

IDYF2016 は、2016 年 3 月 6 日（日）～13 日（日）にかけて東京で開催されました。以下が大まかなスケジュールです。

	午前セッション (09:00-12:00)	午後セッション (13:00-17:00)	夜セッション (18:00-20:00)
Day1(3 月 6 日)		受付	① 開会式（元国連関係者のご講演）、②ウェルカムパーティー
Day2（3 月 7 日）	③アイスブレイク	④課題国選考枠参加者による情報共有	グループワーク
Day3（3 月 8 日）	⑤フィールドワーク	⑥日本の経験の共有	グループワーク、中間発表
Day4(3 月 9 日)	グループワーク	グループワーク	⑦ピアレビュー
Day5（3 月 10 日）	グループワーク	グループワーク	⑧ソーシャル・イベント
Day6（3 月 11 日）	グループワーク	グループワーク	グループワーク
Day7（3 月 12 日）	リハーサル	⑨最終報告会、⑩審査員とのディスカッション	⑪閉会式 ⑫フェアウェルパーティー
Day8（3 月 13 日）	⑬観光（オプション）	⑬観光（オプション）	⑬観光（オプション）

① 開会式

開会式では、共同代表の開会挨拶に続いて元国連事務次長補で現在日本国際連合協会理事を務められる久山純弘様に基調講演を行って頂きました。将来の国際社会を担う若者たちにに対して久山様のご経験を基にした熱いメッセージを送って頂き、今年度会議の良いスタートを切ることが出来ました。講演後は参加者から多くの質疑が行われ、現在国連が抱える課題や将来の開発課題に関する活発な議論が行われました。

開会式では研究担当の有田より、改めて IDYF2016 のアジェンダ、” Industrial Development & Environmental Protection（産業発展と環境保護）～インドネシア、ペカロンガン地方 のバティック染産業による川の汚染問題を通して考える～”が確認されました。これから始まるフォーラムに参

加者が期待を膨らませている姿が印象的でした。

② Welcome Party

開会式が終わった後には、オリンピックセンターの A 棟カフェフレンズにてウェルカムパーティーを行いました。

参加者は机の上にずらっと並んだおいしそうな食事物に興味津々の様子でした。中にはそれまで参加者の誰も見たことが無いスイーツがあり、「これは日本の食べ物なの？」と聞かれた日本の参加者が笑っている、という光景も見受けられました。

長旅を終えたばかりの海外の参加者には疲れも見られましたが、おいしい料理を囲んでの会話で会話もはずみ、参加者はどんどん仲良くなっていきました。

パーティーが一段落した頃にはフォトコンテストの優秀者の表彰を行いました。フォトコンテストは、IDYF2015 から引き続いて実施された企画です。これは Facebook ページ上で開催される企画で、参加者が IDYF のロゴを載せた自分の写真を投稿し最も写真に投票(like)を獲得した参加者に景品を贈るというものです。自分の国の有名なスポットで撮った写真や、自分の好きな場所を紹介する写真など、それぞれ様々な趣向を凝らしています。IDYF2016 のフォトコンテストでは、フィジーからの参加者が賞を獲得しました。景品はだるまや可愛らしい和風の雑貨で、参加者は大喜びの様子でした。賞を得られなかった参加者も、このフォトコンテストを通じてお互いのことをよく知ることができたようです。

参加者は翌日からの議論に向けて部屋に戻ったり、宿泊棟に戻って他の参加者と会話を続けたりと、思い思いの夜を過ごしていたようです。

③ Ice Break

2 日目の午前中にはアイスブレイクを行いました。世界中のユースが一堂に会する IDYF では、初対面であることに加え、お互いの文化や価値観が異なるという状況下でそのまま議論を始めることは困難です。そのため、参加者同士がまずお互いのことを知り、絆を深めてもらうことで議論を円滑かつ効率的に行う下準備をすることがアイスブレイクの狙いです。

アイスブレイクとして、IDYF2016 では「お弁当をデザインしよう！」というワークショップを実施しました。

参加者 42 名を 6 グループに分け、それぞれのグループで自分のグループオリジナルのお弁当をデザインしてその絵を書き、その後それぞれのグループが描いた絵を順番に全員の前で発表する、という内容のものです。お弁当をデザインするうえでの制限は（グループ全員が楽しく話すことができさえすれば）特別に設けることはしませんでした。各グループには模造紙とカラーペンが配られ、それぞれが思い思いのお弁当をデザインしていました。

各グループがそれぞれのお弁当のデザインを発表していく時間は、とても和やかなものになりました。すべてのグループが、グループの全ての参加者の出身国の名物の食べ物を詰め込みつつ、非常に凝った見た目のお弁当をデザインしていました。例えば IDYF2016 のキーワードとなるバティック染をイメージしたデザインのお弁当や、新幹線や桜といった日本をモチーフとしたお弁当も見られました。

参加者がお互いの国や参加者自身のことを知る、よい機会となったことと思います。

④ ペカロンガンからの参加者による情報共有

アイスブレイクの次には、課題国選考枠のインドネシア人参加者による対象課題のプレゼンテーションが行われました。発表内容は、ペカロンガン地方の紹介に始まりバティック産業やそれによる汚染の状況、彼らが実施したフィールド調査の結果、及び汚染問題の構造分析でした。全体に対するプレゼンテーションに続いて行われたのは分野別ブリーフィングで、に関して 4 名のインドネシア人参加者から詳細な情報提供が行われました。援助機関等の報告書などからでは把握出来ない現地の一次情報に触れたことにより、アジェンダへの理解を一層深めることが出来ました。

⑤ フィールドワーク

グループごとにフォーラム会場周辺の都心部や住宅街を訪ねて、日本社会が抱える環境問題やそれらを解決するためのヒントを写真に収め、プレゼンテーションを行って頂きました。参加者たちが取り上げたのは東京の都市設計や河川の利用からごみ処理システムまで多岐にわたりました。海外の参加者からは「東京の街は清潔だという前評判は正しかったが、一方でまだ改善できる余地は大いに存在すると感じた。」など印象的なコメントも多く出されていました。

⑥ 日本の経験共有

戦後の高度経済成長の中で日本が経験した二つの公害問題について運営スタッフからプレゼンテーションを実施しました。一つ目に紹介したのは水俣病問題です。住民・企業・地方政府・中央政府・学会・マスメディア等多様なアクターが複雑に絡みあって発生・放置されたこの問題の原因を構造化して見せることで、インドネシア人参加者から共有された情報を生かしてどのように分析を進めればよいか

を理解してもらうことが出来ました。二つ目に紹介したのは山口県宇部市の石炭産業によるばいじん汚染問題です。この問題には前者のような複雑性は見られませんが、「市民、企業、学識者、行政」の四者がデータ第一主義と発生源対策第一主義の下で協議を重ねるという「宇部方式」が実践された事例であり、UNEP 等からも非常に高く評価されている解決策として参加者に紹介しました。これらにより、日本で IDYF を開催することの意義を再確認出来たと同時に参加者の議論のさらなる質向上に大きく貢献することが出来ました。

⑦ ピアレビュー

参加者の議論が深まってきた会議四日目には、参加者や運営スタッフ同士が各グループの解決策についてフィードバックを行う「ピアレビュー」を実施しました。例年と異なり扱っている課題が全グループ共通であるため、グループごとに異なっていた課題設定やそれらに対するアプローチを共有し合うことでアウトプットの質向上に大きく貢献する重要な時間だったと思われます。またグループ間で活発な議論が行われたため、グループの枠を越えた参加者全体の協働関係が一層強化された大変有意義な機会となりました。

⑧ ソーシャル・イベント

IDYF の恒例行事となっているソーシャル・イベントでは、昨年度同様協賛企業の方々と参加者との交流及び参加者間の親交を更に深める貴重な時間となりました。

前半には協賛企業である（株）パシフィックコンサルタンツ様、（株）ビービット様から事業紹介のプレゼンテーションが行われ、興味深く聞き入っている参加者の姿が印象的でした。その後は協賛企業の方々と参加者とが厚く議論を交わしたり、母国を象徴する衣装に身を包んだ参加者たちが各々持ち寄った様々なお土産を共有したり、世界各国の民族音楽を流してダンスパーティーを行ったりと、大変楽しい時間を過ごすことが出来ました。

⑨ 最終報告会

◆概要

最終報告会は国立オリンピック記念青少年総合センターの国際交流棟にて開催され、各グループが3月7日（月）～3月11日（金）の5日間をかけて作り上げた解決策を発表し、質疑応答を経て、日本における開発政策・開発ビジネスに関わる4名の専門家の方々の評価を基に1位～3位までの表彰が行われました。その後は各グループが専門家全員や弊フォーラムのOBOGとディスカッションを行い、それぞれの解決策への直接のフィードバックや意見交換の意見を得ました。

4名の専門家の構成は、外務省から1名、日本国際協力機構（Japan International Cooperation Agency, 以下JICA）から2名、三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社にて開発ビジネスに深い関わりを持たれている方1名でした。

なお、最終報告会は一般に公開されたイベントであり、今年度は約50名の方々にご来場いただきました。学生の方や政府関係者の方、留学生の方など様々な背景をお持ちの方にお越しいただきました。

◆最終報告会の冒頭では、日本国際協力機構（Japan International Cooperation Agency, 以下JICA）の美甘政門様にご講演を頂きました。ご講演の冒頭ではJICAが新興国や途上国における開発課題への対応において果たしてきた役割とアプローチをご紹介いただき、公判ではご自身の経験をもとに開発課題への対応において重要な事柄についてお話を頂きました。以下、その内容を簡単にご紹介させていただきます。

開発課題の解決を目指す際には、「何をするべきなのか(what to do)」を決定し、「それをどのようにして実行するのか(how to implement)」を考えます。その両者において、現地の人々を含む様々な立場のアクターが関わることが重要です。JICAなどの援助機関はあくまで外部から関わる存在（outsider）であり、現状をしっかりと把握し、また、その解決策を持続的に行うためには、現地の人々自身の主体的なかかわり(Ownershipが不可欠です。

「何をするべきなのか(what to do)」を考える際には、多様なニーズすべてに同時に取り組むことは逆に非効率になる可能性があるので、何が重要な問題(issue)なのかを考えます。この重要な問題同士は深くかかわっているので、何が特に重要な問題なのか分析を行うことが必要ですが、いわゆる「データ」だけではその分析を行うことは困難です。政策決定者や現地のコミュニティの人々が持つ感覚や考えを反映して決定することが重要です。

「それをどのようにして実行するのか(how to implement)」を考える際にも、現地の人々に関わっていただくことが重要です。ナイジェリアの郊外に送電線を引くプロジェクトを実施した際には、その地域の伝統的な指導者の方とお話をしてご協力を頂きました。そのことで多くの現地の方々に協力してもらうことができました。また、学校の運営の改善を図るプロジェクトでは、これまで政府や先生のみが学校の運営に関わっていましたが、生徒の両親を含む現地の様々な方々自身が学校にとって何

が大切なのか、何が必要なのかを考えることで、大きな成果を得ることができました。

このように、開発課題の解決策を考え、それを実行に移す際は、現地の方々の主体的な関わり(ownership)が重要となります。現地の人々を含む様々なバックグラウンドを持つ方が話し合うことによって、しっかりとした形で「何をするべきなのか(what to do)」を決定することができ、「それをどのようにして実行するのか(how to implement)」を考える際にも現地の方々の意見や協力が必要となるのです。その意味で、現地からの参加者を含む多様な参加者が開発課題の解決策を考えるこのフォーラムは、意義のあるものと言えるでしょう。

以上が美甘様に頂いたご講演の内容です。フォーラムの参加者や報告会にご来場いただいた方々も美甘様のご講演に深く聞き入っていた姿が印象的でした。この場を借りまして、改めて美甘様に深く御礼を申し上げます。

◆プレゼンテーション

各グループから 5 日間をかけて練り上げた解決策に関するプレゼンテーションと、それに対する専門家の方々からの質疑がなされました。以下、各グループの提案内容を簡単にご紹介します。

1. Green Bridge

Green Bridge は技術的支援、教育、メディア、財政、業務の 5 部門で編成される NPO という設定で、解決策の提言を行っています。彼らは課題を２つに分けて分析しました。課題の一つ目は未処理の汚染された水が流れていることにより地域住民の生活に支障をきたしていることです。そして２つ目として、環境保全に対する住民の知識不足と意識の低さを挙げました。これらの課題への解決策として、3 つのアクションプランを最終報告会では提案しました。

第一に、バティック産業に従事するコミュニティに DEWATS(Decentralized Wastewater Treatment Systems 分散型汚染水処理システム)を導入します。この DEWATS は、最新の技術でメンテナンスも簡単な仕組みを低価格で提供するものです。コミュニティが自主的にシステムを管理できるように研修を開くことに加え、Green Bridge 側も、汚染処理の廃棄物を売り、NPO の収入源とします。この導入には、Borda(Bremen Overseas Research & Development Association)という機関と協力することになっています。

第二に、環境保全に取り組む学生団体と共に、地域の環境問題の啓発を行います。Green Bridge は、

各国政府の開発プログラムや、教育に関する政府機関と協働し、学生の環境保全活動を支援します。

第三に、ペカロンガンの水質汚染についてのメディアの露出を増やすために行動します。ウェブサイトの立ち上げや、関心のある層のプラットフォーム作成などに取り組み、そこで水質汚染に関する世論を扱います。ショートムービーやテレビ番組、新聞、フラッシュモブなどの手段でこの問題を世間の目に触れさせることが具体例として挙げられました。こうした運動では、特に若者、フリーランスのジャーナリスト、リポーター、出版社、地域のテレビ局、ボランティア団体に影響を及ぼすことを狙い、さらに運動を発展させることを目指しています。

Green Bridge は、以上の 3 つの解決策を実施し、⑴人々を川の汚染水から守り、⑵環境保全に対する地域住民の知識と意識を高めることをゴールとして、熱いプレゼンテーションを行いました。

2. Flow

Flow は、ペカロンガンのバティック産業によって引き起こされる水質汚染の解決策を考えるにあたって文化的な側面に着目しました。バティックはインドネシアの人々にとって、彼らの文化的アイデンティティ形成に絡んでいるため、その保全は地域住民の健康や環境保全と同じく重要な要素だとし、長期的な解決に向けて議論を進めていきました。加えて、未来志向で革新的な案を出すには未来を担う若者主体で行動するべきだと、ユース中心のプロジェクトを提案しました。Flow の提言には 4 つのゴールがあります。

まず、地域コミュニティがステークホルダーを巻き込んで解決に向けた戦略を立てる委員会を発足させます。彼らは、地域住民に研修を行うなど汚染をくいとめるシステムの導入を地域に浸透させることを目的に活動しますが、「ペカロンガンの人々の、彼らによる、彼らのための」制度を作ることを重要視しています。その結果より持続的なプロジェクトを目指します。

また、この水質汚染解決において若者がイニシアチブを取ることで、若者が地域コミュニティでさらに重要な働きができることもプロジェクトの狙いです。

3 つ目としては、すでに導入が一部始められているエコラベル承認制度の提案がありました。バティック産業の中小企業を対象に、質を保証するエコラベルで差別化を図ることで、上質な製品を生産する中小企業がより環境保全に取り組めるようサポートします

最後に、ペカロンガンのバティック市場において中小企業がより力を持てるように取り組みます。中小企業の国際競争力を高める一方で、伝統的な価値を失わないような市場戦略をとります。

以上の 4 つのゴールを念頭に、Flow は具体的な解決策をプレゼンテーションでは披露しました。

3. Asia+1

Asia＋1 は、このペガロンガンにおける問題は、短期的ニーズに対する経済活動が、持続可能な環境と人々の健康に優しい社会作りという長期的な利益を全く実現しない形でなされていることに起因しているとしました。そして、この状況は、インドネシア政府が経済活動の自由への制約と環境問題の解決を上手く比較衡量できなかったために、法的解決策が施行されてこなかったことにより、残存し続けていると前提づけ、2 つの解決策を提案しました。

１つは、The eBatik Project と呼ばれるもので、小規模なバティック産業者が、適切な廃棄物処理を行うことで、その組織から拡大市場へのアクセス権を得られるというシステムで、現状よりずっとシンプルに持続的な実行とその透明性を動機づけることを可能にしています。このプラットフォームは、環境

に配慮した廃棄物処理が安定的になされることを地元の産業者に対して義務づける一方で、その見返りとして今まで得られなかった高い実質的利益を還元することで win-win な循環を作り出しました。この初期資金は、クラウドファンディングや国際機関からの資金援助をベースとし、廃棄物処理による川の汚染を改善しつつ、小規模な産業者を保護することで、継続した現地の文化を保護することに寄与します。

2 つ目の解決策として、文化保護と経済的繁栄のためのペガロンガン連合体（The Pekalongan Coalition for Culture and Prosperity）という NPO 法人の設立を挙げています。この組織は、ペガロンガンの環境の再構築と経済的発展に向けて、全ての小規模なバティック産業者たちの相互協力を助長し、必要なプロジェクトを通して彼らを支援し、コミュニティの効率的かつ持続可能な発展を促進します。また、この組織に認定されたバティック製品に eBatik ブランドという価値を付与することで、大規模な産業会社をも巻き込み、市場開拓を行うという画期的なシステムにより、地域の経済的な発展を確実なものとします。そして、ペガロンガンが、経済的かつ環境に配慮された活動を通して、貴重な伝統的バティック産業を営む街として一体感が生まれるのではないかと Asia＋1 は期待しています。

4. Green Tomato

Green Tomato はペカロンガンで起きている問題のうち、水の汚染そのものだけではなく、バティック産業における生産者の低い収入が水の汚染に大きくかかわっていることに注目しました。Green Tomato の発表によれば、ペカロンガンの住人のうち 70%は重度の貧困に陥っているため、バティックの生産者も安価であるが環境に悪影響を及ぼす染料を使用するしかなく、また、良い教育を受けることができないため自分たちの行動がいかに環境に悪影響を与えているか気づいていません。また、環境に優しい染料は環境に悪影響を及ぼす染料の 10 倍もの値段のするものです。

このチームは短期的な解決策と長期的な解決策の 2 つを提案しました。短期的な解決策で早急に水の汚染を緩和し、長期的な解決策ではバティックの生産者たちの収入の状況を改善し、貧困と環境汚染の悪循環を終焉させることを目指します。

短期的な解決策では、膜技術とバイオ技術の両方の使用について言及しました。前者は比較的高価であるものの高い効果を持つ技術であり、後者は非常に安価であるものの効果が比較的低い技術です。これらの技術を両方活用することで、安価かつ効果の大きな水浄化システムを実現することが可能になると主張しました。また、短期的な解決策の中では、50 存在する現地の NGO が地元政府などに存在する汚職問題にも取り組んでいくべきだと主張しました。

長期的な解決策では、地元政府や NGO、現地コミュニティの指導者が国際機関から借款を得るため、また、環境に優しいバティックを国内外に展開するために協働するべきであると述べました。国際機関からの借款は、ペカロンガンを環境問題に取り組むロールモデル的な事例として扱うことで可能になると主張しました。この借款によってより多くの生産者の経済的困窮が緩和され、また、必要な設備に投資が行えることになります。また、この解決策のポイントは、地元のバティック生産者の共同組合を設立するところにあります。バティック生産者がこの組合に参加するには、グリーン・インディケーターという環境基準をクリアする必要がありますが、組合に参加することで様々な恩恵を受けることができます。例えば、製品にエコ・フレンドリーな商品としてラベリングをつけることができますし、e コマース（ネット販売、オンラインオークションなど）などの取り組みに参加することができます。現地の低収入層はインターネットへの安定したアクセスが無いため e コマースに参加することは現状困難です

が、協同組合のシステムを用いることで、環境に優しく体にも優しいバティックとして国内外に高付加価値の製品を売り出すことが可能となります。特にバティックで乳幼児を包んで運ぶ層も一定数見られることから、環境と体に優しいバティックに対する需要は一定数あるのではないかと主張しました。また、バティックを販売する際には「環境に優しいバティックを買ってくれてありがとう」というメッセージを添えた形で消費者の手元に届くようにすることを考えており、その見本を作成して審査員に見せながらのプレゼンテーションとなりました。

5. CHAOS

CHAOS はペカロンガンにおいて環境保護の意識があまり強くなく、その背景には経済状況の不安定さがあるという点を指摘しました。低所得である現地の小規模なバティック工場における製造者たちは、毎日の暮らしを生きることで背一杯であり、環境保護に関心を持つ余裕がないというのです。そこで CHAOS は地元の人々に環境問題により関心を持ってもらうために、環境問題に取り組むことについてインセンティブを与えようというアイデアにたどり着きました。環境に優しいという付加価値を彼らの製品に与えることで、より高い収入を得られるようにし、それをヨーロッパなどの海外市場で競争力の高いものとして売り出したいというのです。

このようなアイデアに基づいて CHAOS が創り出した解決策は、地元の小規模なバティック工場が加盟する協会（Association）を作るというものです。この協会の機能は小規模なバティック製造者に対して様々なサービスを行うことです。例えばこの協会は、環境に優しい製品に対して認証を与えます。このことによって、小規模製造者の作った製品は、「大規模工場で大量生産されたものではなく、伝統的な家族経営の製作所によって作られた」というイメージと、「環境に優しい製品である」というイメージを得ることができ、国内外の市場で高付加価値の製品になることができます。また、協会に加盟した小規模事業者の間でより効率的に製品づくりを行うための情報共有が行われます。そして、不慮の事故の際などに小規模製造者の家族が生きていけるよう、それまで協会に貢献した度合いに応じてお金を受け取ることができるという一種の保険制度が設けられます。

こうしたサービスは、加盟している小規模事業者が協会にその製品を売った額と、協会が外部にその製品を売った額の差額を運用することによって実現されます。この運用はエコ・フレンドリーな選択肢のためになされなければなりません。それを確かにするための方法として、CHAOS はグリーン・バウチャーという方法に行き当たりました。この協会が得た収入の半分は銀行に支払われ、その分協会はグリーン・バウチャーという一種の証券を得ます。このグリーン・バウチャーは環境に良い製品や商品しか購入することのできないものです。また、NGO などの組織がこの協会のオブザーバーとなることで、この協会が環境に優しい活動をすることをより確かなものにします。

以上の多様な機能をいきなり実施するのは多少無理があるため、まずは認証機能など一部の機能のみからはじめ、ある程度高い収入を得ることができた時点で少し機能を増やしていく、という形で段階的な実施を試みます。

この協会のプロジェクトを現実可能性のあるものにするために、CHAOS は協会を設立する前の段階にも注目しました。現地で共有された宗教に基づいたコミュニティのリーダーに議論のファシリテートをしてもらいながら、まずは現地の小規模製造者に協会の設立というアイデアに関心をもってもらうことが必要です。関心を持ってもらってから協会がどのように自らに便益をもたらすのかを理解してもらい、そのうえで協会の活動に加わってもらうことが大切です。

6. H_2O

H2O は、2010 年に在インドネシアドイツ商工会議所が実施した Clean Batik Initiative という環境に優しいバティック製品を生み出すための試みが、近隣のジョグジャカルタ特別州では大きな成果を収めた一方で、ペカロンガンでは芳しい成果を残すことができなかったことに着目し、Clean Batik Initiative から一歩進んだ取り組みを創出することを目指しました。

H2O が提案した解決策は、バティックの生産から消費までの全ての段階におけるアクターを取り込みつつ、環境に優しいバティックを流通させることを目指したものでした。H2O は、バティックの生産者のみに環境に優しいバティックを作るインセンティブを与えてもあまり効果は無いと主張しました。それは、消費者は基本的に、環境に優しくても値段が高い製品を買いたがることはなく、また、こうした理由から販売者も環境に優しいバティック染製品を自らの店舗に置きたがることはないだろうと考えたからです。こうした考えから、H2O は、バティック生産者に環境に優しいバティック染製品を作りたいと思わせ、販売者には環境に優しいバティック染製品を売りたいと思わせ、そして消費者に環境に優しいバティック染製品を買いたいと思わせるという 3 つのモチベーションを喚起することを重視して解決策の創出にあたりました。

H2O の発表によれば、ペカロンガン地方におけるバティック染による水質汚染問題に対処するには、最終的には文化的側面に変化をもたらすなど、長期的視点を持って対策を打つことが重要です。そして、長期的視点を持って対策を打つうえで特に根本的な問題となるのは、経済の問題であると主張しました。

そこで H2O は 3 つの解決策を提示しました。1 つ目は中小規模のバティック生産者に対して融資を行い、その代わりに環境に優しいバティックを生産させるというものです。2 つ目はグリーン・バティック・サミットを開催し、最も環境に優しいバティック生産者を表彰するというものです。3 つ目は、QR コードを用いたマーケティング手法です。具体的なプロセスは下記の通りとなります。

① green procedure company が生産者に対して、ローンを貸す。
② その資金を元にバティック製品を生産するときには、green process という環境に優しい手法が用いられる。
③ 環境に配慮がなされた製品を市場で販売する。
④ ①～③の過程において、この Green Batik の目的がきちんと遂行されているか・改善の余地はあるかなどを見直すサミットを年 1 回開催する。
⑤ 中小企業に対し、サミットの結果を報告し、必要であれば勧告する。

※サミットでは、より高い利益を生み出しているか、化学的廃棄物の排出を削減しているか、消費者から人気を得られているかどうか、等が企業評価の基準として設けられている。

◆結果発表

審査員の方々の議論の結果、Green Tomato が 1 位、Green Bridge が 2 位、CHAOS が 3 位に選出されました。選出理由の際にはビジネスモデルとしての面白さがあること、若者ならではの発想であること、参加者の様々な専門をうまく融合させた内容であることなどが注目されました。

また、審査員の方々はすべてのプレゼンテーションが素晴らしかったとして順位の決定の際に非常に

苦慮されており、ある審査員の方からは「すべて 90 点以上の中から順位を決定するようなものだ」というお言葉を頂いていたことも特筆すべき点であると考えます。すべてのプレゼンテーションに他のグループとは異なる良さがあり、このフォーラムにおける参加者一人一人の計り知れないほどの努力の賜物であるとの印象を受けました。

⑩ 専門家の方々や OBOG とのディスカッション

6 つのテーブルを用意し、うち 4 つのテーブルに専門家の方お 1 人ずつ、1 つのテーブルに OBOG にご着席頂き、各グループが順番に 1 つ 1 つを回るという形式でディスカッションを行いました。

専門家の方々からは各グループの案を深堀するような質問が投げかけられ、それに対して各グループが返答し、議論を重ねることで、それぞれの解決策がより深みを増していきました。参加者は非常に議論に熱中しており、10 分間の制限時間を過ぎそうになっても専門家の方とお話を続けたそうにしている参加者もしばしば見られました。また、OBOG からは解決策に対する質問だけではなく、「このフォーラムで何が一番大変だったか」などの質問が投げかけられ、フォーラム全体を振り返る良い機会となりました。

⑪ 閉会式

閉会式は最終報告会に引き続き、国立オリンピック記念青少年総合センターの国際交流棟にて開催されました。

閉会式ではまず、参加者一人一人に参加証が共同代表から手渡されました。また、グループごとに登壇してもらい、グループから 1 名代表としてスピーチをしてもらう機会や、スピーチに引き続いてグループで写真撮影をする時間が取られました。参加者は全員達成感にあふれ、一方でグループやフォーラムの仲間たちとの別れを惜しんでいるように見えました。

閉会式の最後には、インドネシア、ペカロンガン地方の参加者からのスピーチがありました。その参加者はペカロンガンにて NPO の一員としてバティック染の引き起こす河川の汚染問題に対する取り組みを行っており、今後も IDYF2016 で得たアイディアを活かして活動をしていきたいということ、今後もフォーラムの仲間たちと問題を一緒に考えていきたいということを述べていました。聞いていた他の参加者からは拍手喝采や声援が聞こえ、感動的な閉会式の幕切れとなりました。

⑫ Farewell Party

閉会式の後には新宿に電車で移動し、フェアウェルパーティーが行われました。

フェアウェルパーティーは参加者全員が集まるイベントとしては最後のものであり、全員別れを惜しみながらも笑顔で食べ物を囲んでいました。パーティーの中では、フォーラム期間中に運営側で作成していた、参加者 1 人 1 人が夢を語るビデオが上映され、笑顔と拍手に包まれていました。ビデオの上映の後には、また会おう、次はどこで会おう、という再会を約束する会話があちこちで聞こえ、今後も IDYF2016 のつながりが続いていく強い予感にあふれたパーティーでした。

また、フェアウェルパーティーで見られたつながりは横のつながりだけではありません。過年度の IDYF に参加者や運営として参加していた IDYF アラムナイが 5 人ほど参加して IDYF2016 の参加者と語り合っていたほか、サプライズとしてインドネシアの IDYF アラムナイからのサプライズビデオレターが流れ、参加者が皆大変喜んでいる様子が印象的でした。

フェアウェルパーティーが終わると、参加者は思い思いに他の参加者との時間を過ごしていました

⑬ オプショナルツアー

◆概要

最終報告会の翌日 3 月 13 日に、鎌倉を観光するツアーを開催しました。スタッフと参加者総勢約 20 名で、会期中のチームや参加者と運営側といった枠を超えて楽しい時間を過ごしました。日本人にとって鎌倉は有名な観光地ですが、海外参加者にとっては都内に比べて気軽にアクセスしづらいこともあり、このツアーが観光の良い機会になった人が多かったようです。

◆ツアーの詳細

鎌倉に到着後、昼食として運営側で事前に予約をしていた和食を楽しみました。日本食ならではの繊細な味付けや、料理の盛り付けや器の華やかさに参加者一同感動していました。昼食後は大仏や長谷寺といった鎌倉の有名観光スポットを巡りました。参加者は伝統的な建築様式や、巨大な大仏をじっくりと眺めて楽しんでいました。また好評だったのが竹林です。まっすぐにそびえる竹が日本のイメージに合うのでしょうか、多くの人が記念撮影をしていました。日本人参加者も、海外参加者の反応を見て、改めて日本の自然の美しさに気付いたと述べていました。またお寺や竹林を見ながらいただく抹茶や茶菓子も好評だったようです。

観光中、参加者たちは交流を楽しみ、記念写真をたくさん撮っていました。会期中から仲の良いメンバーでしたが、この日のツアーで一層仲が深まったようでした。一通り観光が終わった後は、各自お土産を買うなど最後まで鎌倉を満喫していました。余談ですが、多くの参加者が会期中やツアーの写真をSNS で公開していました。日本の着物やお寺の装束、庭園などを海外に暮らす人の目線で切り取った写真は、見慣れているはずのわれわれが自国の文化を改めて認識するきっかけになりました。

第 3 章　参加者の声

Memory of your IDYF

フォーラム終了後に、IDYF2016 の参加者 3 名にそれぞれの IDYF での思い出を書き表して頂きました。ここではその文章を紹介させていただきます。

Aditya Bagus Sujati さん

（IDYF2016、インドネシアペカロンガン地方）

IDYF はまさに最高のユース国際会議だと思います。あの場で私は世界中の仲間と出会いましたが、圧倒的な多様な文化・専門性・経験が一堂に会し一つの目標に向かって努力するという特別なプロセスに身を置いた私は、文字通り国境を越えたユースの連帯の力を実感しました。会議テーマは開発課題の現場に立脚したかなりスペシフィックなものだったにも拘わらず、こうした多様な連帯は本当に多様な答えを導きだしていたのです。その過程は、毎日朝から夜遅くまで続く議論など決して楽なものではありませんでしたが、この一つの大きな「家族」の中で彼らと協力する時間は大変有意義で自分をより「プロフェッショナル」にしてくれたと感じています。

さらに IDYF は、暮らしてきた環境や教育制度や文化が如何に多様な人材を生み出しているかを理解する機会であり、自らの母国の課題に対して無自覚ではいられなくした機会でもありました。私は将来再び国際開発の世界で彼らと協働するためにはもっともっと努力を重ねる必要があると感じました。私は一生「開発途上国」に暮らしていたくはありません。よってこれから IDYF での経験を基に自らの国の発展に貢献していきます。最後に、この学びを可能にしてくださった IDYF の運営や支援者や参加者の皆さまに心より感謝申し上げます。

Rosario del Pilar Diaz　Garavito さん（IDYF2016、ペルー）

私はペルーから IDYF に出席した 27 歳の Rosario Diaz Garavito と申します。現在 SDG アクションキャンペーンの Youth Advocate として、また UN ウィメンのウィメン・エンパワメントキャンペーンの代表として働いており、213 名のスタッフとともにペルー国中のローカルコミュニティの声を世界の指導者たちに届けています。

私は IDYF で、大変ハイレベルで特別な経験を得ることができました。IDYF を特別な場にしているのは、ただ講義を聞いて地に足のつかない議論を行うだけでない という点だと思います。私たちは、会議テーマの対象地域であるインドネシアから来た仲間とその他世界各地から来た活動家とが協力し、多様な価値観・経験・視点をもとに問題の核心を突く解決策を作り出しました。その過程で私たち参加者は、世界中から集った仲間から大変多くの知見を吸収することができましたし、そうすることで「世界市民」としての自分たちのアイデンティティが自然と形成されていきました。例えば私のグループには日本、ノルウェー、カンボジア、ペルー、そしてインドネシアからの参加者が居り、しかも夫々全く異なる専門領域や経験を持っていました。当初これらの違いを活用することは大変困難でしたが、次第にこの圧倒的な多様性の経験は私たちのアウトプットや会議終了後に向けた重要な学びとなりました。さらにこうした私たちの取り組みが運営メンバーや審査員の専門家の方々に評価して頂けたことと、会議終了後にはインドネシア人参加者によってペカロンガン地域での課題解決に生かされるということも、私たちの IDYF の経験を特別なものとしてくれました。

IDYF は私たちに、ユースが実際の課題解決に貢献し得る可能性が如何に大きなものであるかということ、そして私たちは孤独な存在ではなく日々異なる言語で異なる環境の下で共通のゴールに向けた活動を行う仲間が世界中に存在しているのだということを教えてくれました。こうした機会を与えてくださった IDYF の支援者の皆さま、運営スタッフに本当に感謝しています。

Ohashi Akifumi さん(IDYF2016、日本)

こんなに複雑な感情を抱くことになるとは、予想だにしなかった。このフォーラム中に持った様々な思いや、野望、記憶などが頭の中を激しく駆け巡っていた。自分がこの 1 週間で得たものを直ちに全て言語化することはできないが､今 1 つ言えるとすれば、世界中の友人との異文化間コミュニケーションを通じて、本当に多くのことを学ぶことができたということだ。

フォーラムが始まる前は、実のところ、初めて会った参加者と、それも全く異なる経験や思想を持つ世界中からの参加者と、たった 1 週間で信頼関係を築くことができるか不安であった。しかしながら、最終的により高い成果を生むためには、グループで 1 つの目標に向かって協力することが不可欠であった。1 の仕事をできる人たちが 6 人集まったとして、単純合計で 6 の仕事をただ為すよりも、協力して全員で 9 の仕事を成し遂げられた方が良いのは自明だからである。そこで、私たちのグループでは、それぞれのメンバーの可能性を信じ、シナジーによってグループのアウトプットを最大化しようと試みた。「皆で最高のものを」、「メンバーそれぞれが、それぞれの能力を最大限に発揮できるように」、こういった意識をメンバー全員が強く持っていたおかげで、メンバー間の意見の相違や、技能・専門分野・背景の違いを乗り越え、むしろ最大限に活用して、革新的で効果的な解決策を提案できたのだと思う。これは、IDYF2016 で得た最も素晴らしい体験の 1 つであった。

また、35 カ国 47 人の友人と親密な関係を築くことができたのも、とても嬉しいことであった。彼らから新たな考え方や知識を学ぶことは非常に刺激的であったし、加えて、これまでどうしても実感を欠きがちであった世界での出来事も、世界中にいる彼らの表情と共に浮かび上がるようになり、当事者意識を持つことができるようになったのだ。もうこの 47 人と同じ場所で再会することはないだろうと思うと､寂しい気持ちが溢れる｡しかし､この 1 週間で築くことができた絆は深く、またどこかで会える日が来ると信じている。

最後になるが、すべての参加者、スタッフ、支援者の皆様に感謝の意を表したい。本当にありがとうございました。

OBOG からのメッセージ

IDYF の理念である Design Our Future はフォーラムが終わった後もその重要性を失うものではありません。今回の開催で 4 年目を迎える IDYF には、およそ 140 名の OBOG が存在しており、多くの OBOG が世界中でそれぞれのやり方で Design Our Future を実現しています。

今回は IDYF2014 参加者の Misaki Suto さん、Shotaro Goto さんからのメッセージを含め、OBOG から寄せられたメッセージの一部をご紹介します。

Misaki Suto さん(IDYF2014、日本)

私が参加した 2014 年の IDYF は、開発課題についての解決策を「プロダクト」で提案するという内容でした。世界 40 か国からの参加者たちは、他の年の IDYF がそうであるように、驚くほどに皆、人格・経歴共に素晴らしいメンバーでした。一週間で「プロダクト」を提示するというのは、容易ではありませんでしたが、参加者・スタッフ全員が目標を共有し、一緒に進んでいた一週間は、本当に貴重な時間であったと思います。

私が最も思い出すのは、最終発表会の前の数日、チームメイトの部屋にメンバー全員が集まり、夜遅くまで作業したり、早朝から準備をしたりしていたことです。これほど頑張れたのは、自分たちが解決したい課題への問題意識や、最後まで努力を惜しまずチームのプロダクトに磨きをかけようという思いがチームの全員で共有されていたからだと思います。そして、それは私のチームだけでなく、どのチームも同じであったように感じます。

IDYF での出会いから既に 2 年が経ちますが、参加者間では SNS 等での交流が現在でも続き、また世界中を飛び回る参加者同士で、度々同窓会が行われています。私も、先日インドネシアを訪れた際には、インドネシアからの参加者の友人の家に泊まり、他の参加者も一緒に近況報告などをしました。自分でスタートアップを立ち上げたチームメイト、政府の金融や開発部門で働き始めた友人など、幅広い分野で使命感をもって活躍する仲間に自分も背中を押されました。

私は、IDYF に参加したその年から、開発学・地域研究で著名なロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）の修士に入学し、昨年末に法・開発・ガバナンス専攻を修了しました。世界中から集まる多様なバックグラウンドをもつ学生の中で、議論のファシリテーションをしたり、チームマネジメントをしたりできたのは、IDYF での経験があったからこそだと思います。また、プログラムの中で教わったデザイン思考などのツールは、実際に自分の研究の中でも使用し、面白い視野を提供することができました。

このように、IDYF での経験と学び、そしてそこで得た素晴らしい友人たちとの関係は、自分に

とって本当に貴重な財産となっています。今後も、アラムナイ・ネットワークなどで IDYF の輪が広がり続け、IDYF が開発課題の解決にさらに貢献できるようなプラットフォームになっていくことを願っています。

Shotaro Goto さん(IDYF2014、日本)

2014 年度、IDYF 参加者の後藤正太郎です。私は、当時から強い関心があった途上国開発に関して、同じような志を抱いている世界中からの参加者と議論したいと考え参加しました。

私たちのチームは、途上国の衛生習慣を改善するために、トイレマットを考案しました。子供たちが水によってマットに絵や文字を書くことができ、トイレという空間を楽しむことができるため、トイレをきれいに保つことができるというアイデアです。結果として、他のチームと比較して高い評価を得ることはできず、アイデアを実際に形にすることもできませんでした。しかし、様々なバックグラウンドを持つ参加者と交流することができ、たいへん充実した時間を過ごすことができました。特に、私のチームにはセネガルやソマリア出身の参加者がおり、アフリカ出身者とほとんど会話をしたことがなかった私にとっては、彼らと議論できたことはたいへん貴重な経験でした。彼らの国の状況を直接聞くことができ、いつかアフリカにも行ってみたいと考えました。

また、当時の日本人参加者の方々もたいへん印象に残っております。開発援助機関の内定者や英国の大学院への入学が決まっている学生などからよい刺激を受け、一方で私自身の経験・知識不足も痛感しました。IDYF を通して、私の開発分野に関するモチベーションが上がったことを覚えています。

現在私は、3 月に大学院を卒業し、4 月から開発コンサルタントとして、途上国の都市衛生改善のための排水や下水整備に従事するつもりです。IDYF 後、2 年間の大学院生活では、IDYF で感じた、「いつかアフリカにも行ってみたい」という想いを、1 カ月のモザンビークでのインターンシップなどで実現することができました。加えて、合計で 5 カ月間バングラデシュにも研究留学するなど、IDYF 参加当時に不足していた開発分野に関する経験を少しずつ積みつつあります。

また現在も、IDYF に参加した学生とは国内外問わず連絡を取り続けています。これから、途上国で働く機会も増えるので、途上国出身の参加者とのつながりを大切にし、また開発業界で一緒に働く可能性のある日本人参加者とのつながりも大切にしたいです。

IDYF を通して、既存の課題解決のアイデアと照らし合わせながら、どのようにしてアイデアを考案するかを学びましたが、それ以上に優秀な参加者と交流できたことがよかったです。今後も、途上国の衛生改善のために努力を続けていきます。

その他 OBOG から寄せられた声のご紹介

社会の問題は自分も当事者だと気づいた

世界中から集まった優秀な若者と「未来の社会はどうなるべきか」「そのために私たち若者は何ができるか」を熱く語り合った 7 日間は、非常に刺激的な時間でした。それまで少し他人事のように感じていた社会の問題が、自分も当事者であり、解決するために働きかけることができるということに気づきました。

開発の世界への第一歩が踏み出せる場所

世界中の仲間と出会え、一生のつながりができ、さらに自分の開発への考えも深まりました。IDYF は自分にとって世界中を旅しつつ、しっかり勉強でき、さらに開発の世界への第一歩が踏み出せる場所でした。

参加者の世界中での活躍からパワーをもらっています

革新的なコンテンツに加え、参加者の選考も圧巻。素晴らしいキャリアと人間性を兼ね備えた各国の参加者に出会えたことは本当に貴重な経験で、IDYF が終わった今でも交流が続く彼らの世界中での活躍からパワーをもらっています。

「開発」に関心がある多くの方々と会い、そして議論できた

IDYF で経験できたことは多々ありますが、その中でも「開発」に関心がある多くの方々と会い、そして議論できたことが最も印象に残っております。各参加者が、様々な思いや考えを持っており、大変勉強になりました。

途上国には途上国のリーダーがいる

「途上国には途上国のリーダーがいる」これが強く最も感じた事でした。1 週間のワークショップを通じて世界中の優秀な仲間に囲まれた事は刺激以外の何者でもなく、米系企業でマーケターとして働く私にとっても多くの学びがありました。学生はもちろん社会人の方にも自信を持ってオススメできます。

第 4 章　運営報告

事業スケジュール

IDYF2016 の運営は以下のようなスケジュールで行われました。

2015 年 6 月	運営組織発足 団体理念・目標の確定
7～9 月	「課題国選考」（IDYF2016 アジェンダテーマの公募、決定）
11 月～12 月	「参加者選考」（参加者の選考、決定）
2016 年 1～2 月	ビザ手続き、最終調整
3 月 6 日－13 日	IDYF2016 開催

後援・協賛

本年度は下記の企業様・団体様に後援・協賛を頂くことが出来ました（敬称略、順不同）。こうした温かいご支援を頂いたおかげで本事業は成功を収めることが出来ました。IDYF2016 運営スタッフ一同、改めて厚く御礼申し上げます。

【後援】
外務省
独立行政法人国際協力機構(JICA)
【協賛】
オーストラリア留学センター
パシフィックコンサルタンツ株式会社
株式会社ビービット
RAUL 株式会社
【助成】
公益財団法人　三菱 UFJ 国際財団

（以上五十音順、敬称略）

ほか、クラウドファンディングでのご寄付や、後援・協賛といった形以外でも数多くの方々にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

会計報告

	項目	金額（円）
収入		
	参加費	1,570,000
	助成金	400,000
	協賛金	380,000
	クラウドファンディング	51,402
	前年度の繰越金	312,379
	海外開催積立金	400,000
合計		**3,113,781**
支出	宿泊費・会場費	1,200,400
	食費	761,460
	参加者渡航費援助	329,300
	謝金	8,000
	交通費	16,802
	事務費	106,832
	印刷製本費	5,430
	その他	33,825
	*海外開催積立金	400,000
	次年度繰越金	251,732
合計		**3,113,781**
収支		**0**

*海外開催積立金…将来的なフォーラム海外開催に当たる必要出費充当経費

運営メンバー

運営メンバー構成（所属は 2016 年 3 月 1 日時点）

役職	氏名	所属
共同代表	俵藤あかり	東京大学法学部 4 年
共同代表	太田優人	慶応義塾大学法学部 2 年
研究	有田早希	東京大学教養学部 3 年
研究	ラブレンテヴァ・ソフィア	東京大学文学部 3 年
渉外	戸嶋一博	東京大学経済学部 3 年
渉外	温井絵里香	慶応義塾大学法学部 2 年
渉外	サハ・ラチャナ	東京大学教養学部 2 年
総務	清水諒右	東京大学経済学部 4 年
総務	井野口碧依	東京大学教養学部 4 年
総務	稲岡優美子	東京大学法学部 3 年
広報	瀬川知己	東京大学経済学部 4 年

その他多くの当日スタッフの方にもご協力いただきました。誠にありがとうございました。

おわりに

IDYF2016 の成果と課題

ここまで報告書をお読みいただき、ありがとうございました。多くの方のご理解、ご協力のおかげでフォーラムを無事に開催できましたこと、心より感謝申し上げます。最後に IDYF の理念・目標から IDYF2016 の成果と今後の課題を総括し、本報告書の結びとしたいと思います。

目標１　「国際開発に関心があるユースの継続的なネットワーク構築」

◆成果

今年度の IDYF でも、国際開発について学ぶ学生から国連従事者まで、国際開発に関心を有するユースに参加いただき、ディスカッションやイベントを通して交流を行うことができ、参加者間に強い絆を生むことができました。フォーラム終了から 4 か月がたった 2016 年 7 月現在に至っても、Facebook 上では今でも参加者間のやりとりが続いています。

今年度は、横のつながりだけではなく年度を超えた縦のつながりの強化も行いました。最終報告会やフェアウェルパーティーでは国内のアラムナイとの交流やビデオレターを通した海外のアラムナイとの交流を行い、また、過去の参加者が参加する Facebook 上のアラムナイページへの招待も行いました。アラムナイページでは過去の参加者が他の国際イベントの紹介や各年度のフォーラムのテーマに関する情報の共有を行っています。

◆課題

今年度も当フォーラムは 1100 名を越える応募を受けましたが、実際に受けいれることが出来た参加者は 42 名に留まり、応募者に対する参加者の割合は大変小さいものとなっています。国際開発に関心を有するより多くのユースがつながる機会を、フォーラムの質を向上させつつ拡充していくことが必要です。また、フォーラムに参加することは全ての参加者にとって経済的に容易なわけではありませんが、今年度は渉外上の困難により、1 名にしか奨学金を提供することができませんでした。高い能力と志を有するユースのフォーラム参加を支援するための手段をより充実させていく必要があります。

目標２　「多様な価値観と深い知見に触れる機会の提供」

◆成果

インドネシア、ペカロンガン地方で問題に実際に向き合っている現地の若者と一緒に解決策を考えることが大きな刺激になったという参加者の声を耳にします。また、インドネシア、ペカロンガン地方からの参加者たちも、自らが抱える問題に様々なアプローチができることに喜びを持ちながら驚いていた様子でした。

また、今年度も専門家の方々から様々なインプットを頂戴し、参加者が知識や考えを広げる手助けをしていただきました。具体的には、開会式では元外務省・国連職員の方にお越しいただき、ご講演と参加者とのディスカッションにご参加いただきました。最終報告会には、貴機構の職員の方（2 名）、外務省職員の方（1 名）、コンサルタントの方（1 名）にご参加いただき、参加者の創出した解決策に対する詳細なフィードバックを頂きました。

◆課題

今年度は最終報告会以外の場で外部組織の方から知識のインプットを頂く機会を提供することができませんでした。3 月は研究者の方や企業でお勤めの方にとっては委員会・決算などで多忙な時期であるためかと思われます。次年度はより早い時期からテーマを確定させて専門家の方にお声掛けすることを目指すべきかと考えられます。

目標３　「社会に新たな変化をもたらす成果の創出」

◆成果

今年度は、取り扱う問題(インドネシア、ペカロンガン地方の河川の汚染問題)に直面する現地の若者に 7 名フォーラムに参加して頂いたことで、現地の状況をよく鑑みた解決策が創発されたことと思います。例えば現地住民の意識、子供の立ち位置など、現地の方から話を聞かなければわからないような情報に着目して解決策を創出したグループが多くみられました。

また、そうして創出された解決策を参加者が発表する最終報告会には多くの方にご参加いただき、また、メディア(学生新聞など)を通して広報をしていただいたことで、多くの方に関心を持っていただけたものと考えます。

◆課題

国際開発に関心を有するユースを世界中から集めたフォーラムとして、社会に直接的に新たな変化を起こすことが出来たかという観点からは、十分にその目標が達成できたということは出来ません。フォーラムの成果が、更に社会に対して価値を有するものにすべく、フォーラムの内容・形式あらゆる側面から改善を重ねていく必要があります。

また、よりよい解決策を評価するという点では、最終報告会の構成についても再考すべきであると感じました。参加者の一人から、専門家や OBOG とのディスカッションは審査や結果発表の前に行うべきであったとの意見を頂きました。このディスカッションを行うことで初めて自分のチームの解決策の意図が審査員である専門家の方々に伝わったという感覚があるため、審査や結果発表の前にフィードバックを行っていたほうが適切な順位付けができたであろうと感じた、との意見でした。このディスカッションの時間の設置は本年度初めての取り組みということもあり、様々な事項に配慮しつつ試行錯誤をしながら導入したものでありましたが、このような意見を受けて、参加者視点に立って構成を考える重要性を再認識しました。このような貴重な意見を頂いた参加者の方にはこの場を借りて改めて御礼を申し上げたく思います。

IDYF2016 で達成した成果についてはそれを継続し、課題については改善を進めることで、IDYF は Design Our Future を実現するためのプラットフォームとして、今後も長期的に継続したフォーラ

ムの開催を目指しています。フォーラムの開催自体を自己目的化することなく、更にフォーラムの価値を高めていくべく今後も努力をして参ります。どうぞ温かくお見守りいただければ幸いです。IDYF2016 に関わってくださいました皆様に深くお礼申し上げ、結びとさせていただきます。

IDYF2016　共同代表　俵藤あかり　太田優人

【発行主体】

国際開発ユースフォーラム 2016 運営チーム

国際開発ユースフォーラム 2016 の開催を目的とした運営組織。11 名の大学生で構成される。うち 2 名は留学生。2015 年春から開催準備を行った。

ホームページ：http://idyforum.org/
Facebook Page：https://www.facebook.com/idyforum

国際開発ユースフォーラム 2016 報告書

2016 年 7 月　　発行